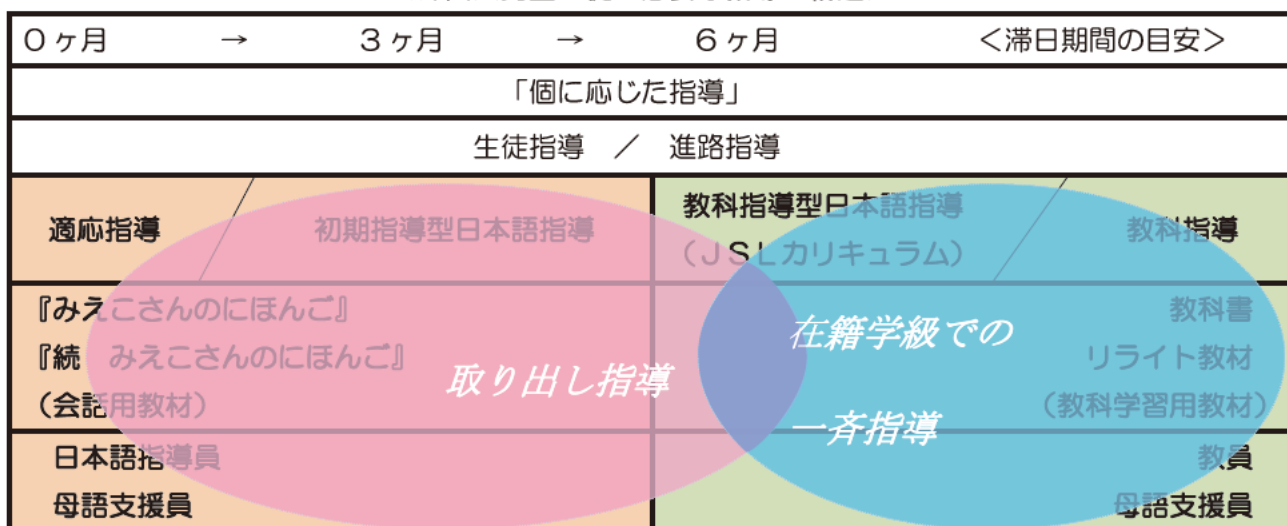


日本語指導と教科指導のつながり

＜外国人児童生徒に必要な指導の構造＞



初期指導型日本語指導の延長線上に教科指導（型日本語指導）があるわけではない

- ◆「適応指導／初期指導型日本語指導」と「教科指導型日本語指導／教科指導」では、学習目標も主たる指導者も異なる（両者は質的に区別する必要がある）。
- ◆「初期指導型日本語指導」を続けていけばいつの間にか、子どもは「教科指導」についてこられるようになるわけではない。教科指導についてこられるようにするため、「初期指導型日本語指導」の次に、意識的に「教科指導型日本語指導」（JSLカリキュラム）に取り組む必要がある。
- ◆JSLカリキュラムは、それに従って指導していけば教科指導に移行できるという体系化された「カリキュラム」ではない。JSLカリキュラムは、「日本語で学ぶ力」を育成するための「教科学習用の支援ツール」である（日本語指導用の支援ツールではない）。

取り出し指導の目的を明確に

- ◆取り出し指導は、単なる別室での少人数指導ではない。
 - ・（在籍学級での学習の）先行学習なのか。
 - ・復習なのか（未定着内容、既習内容）。
 - ・補充学習なのか（未習内容）。
 - ・会話力を高めたいのか。
 - ・教科学習力を高めたいのか。
- ◆教科指導を行うための取り出し指導の場合は、在籍学級での授業との連続性は必ず考慮する（進度、宿題など）。
- ◆場当たりに指導を行わない。到達目標を意識した長期的な指導計画が必要。
 - 到達目標と到達時期の設定の仕方によって、取り出し指導時間数も取り出し方も異なる。

在籍学級での指導の目的を明確に

- ◆教科学習力の向上を目指すためには、在籍学級の授業を中心にして指導体制と指導時間割を組み立てる必要がある。
- ◆取り出し指導だけで教科学習力の向上は難しい（ただし、「全取り出し」であれば可能）。取り出し指導の時間数が十分に確保できないなら、日々の在籍学級での「わかりやすい授業づくり」の配慮が必要。
- ◆JSLカリキュラムは、「教科学習用の支援ツール」。
- 主たる指導の担い手は、
 - 教科指導の専門家（＝教員）
 - ×日本語指導の専門家（＝日本語指導員）